慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『太平廣記』と近世怪異小説：『伽婢子』の出典関係及び道教的要素
Sub Title	The taipingguangji (stories of peaceful times) and ghost stories of the modern ages : on the relation with the sources of "Otogiboko" and its taoist factor
Author	王, 健康(Wang, Jian Kang)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1993
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.64, (1993. 12) ,p.1- 19
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00640001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『太平廣記』と近世怪異小説

――『伽婢子』の出典関係及び道教的要素

王　建　康

はじめに

浅井了意（？～一六九一）が中国の怪異小説を翻案して書いた『伽婢子』（寛文六年、一六六六）は翻案怪異小説という特異なスタイルを創出した。この意味で『伽婢子』は近世怪異小説の祖と言ってもよい。

『伽婢子』は68の翻案説話により校正されているが、そのうち明・瞿佑（一三四七～一四三三）の『剪燈新話』より18話、『剪燈余話』より2話を引用している。このほか48の説話の翻案原拠に関しては、長い間研究者らは唯「晋唐の怪異小説の類である」とのみ言及し[1]、究明はしていなかった。昭和二十七年、宇佐美喜三八氏が48話（3話未詳）の原拠を調べ、これらの説話の原拠は、唐、宋、明にわたる16種もの中国古代文献であることが指摘された[2]。その後、学界では『伽婢子』の『剪燈新話』、『剪燈余話』以外の出典に関しては宇佐美氏の説に従ってきた。ところが、

つい昨年、渡辺守邦氏が「浅井了意〈伽婢子〉」[3]に『伽婢子』の『剪燈新話』、『剪燈余話』のほかに出典として中国の叢書『説郛』であるという新しい説を提出された。

本稿ではまず宇佐美氏の説につき検討し、さらに渡辺氏の新説についても考察してみたい。

一、

浅井了意ははたして翻案の際、多数の中国原書を直接使用しただろうか。この問題を解くためには了意が天和二年（一六八二）に撰した『新語園』は一つの手がかりとなる。一条兼良の『語園』に倣って撰集した『新語園』には引用した中国古典文献が三百種以上もあり、うち『太平廣記』の引用と了意が明記したのは15話である。しかし、近年、花田富二夫氏の考証に、了意は『新語園』を撰集する際、直接三百種余りの原書を読んだのではなく、中国の類書『事文類聚』、『太平御覧』、『太平廣記』、『天中記』を原拠としたという。実際に『新語』においては、『太平廣記』より引用した文献は明記した15話をはるかに上回り、141話にも達したことが分かったのである。[4]さらに筆者の調査によれば、『新語園』の巻5、6、8（『太平廣記』を最も多く引用した巻）には『太平廣記』との共通話が記述順に同じに見出せるのである。

巻二〇二―三九三　↓　巻五（四十話引用）
『太平廣記』　巻三九三―四二九　↓　『新語園』　巻六（二十五話引用）
巻四二六―四二九　↓　巻八（三十七話引用）

また、『新語園』巻五の七～十、十四～十八、十九の話はそれぞれ『太平廣記』巻二〇二、二〇六、二〇七による。この

ように同巻内の説話の順もぴったり『太平廣記』の記述順に一致する場合が多い。了意が『新語園』を撰集する際、『太平廣記』を見ながら説話原拠を引用していたことが想像される。

さらに、全体の分類も、『太平廣記』と極めて類似している、

『新語園』分類（花田富二夫）	『太平廣記』分類
（巻一）子供、母子、父子、兄弟、婢、表兄、妻、夫妻	婦人類（賢婦、才婦、美婦、嫉婦、巻二七〇―二七三）
（巻二）賢妻、嫉妻、棄夫、美女、妾、奴婢、美麗傾国	感情類（童僕奴婢、二七五）
（巻三）玉女、妾、醜夫、醜女、人相、人体、頭、首、鼻、目、口、耳舌	相類（二二一―二二四）
（巻四）勇力、軽捷、策略、奇計、奢侈、媚、天命、徳行、誤解	驍勇類（一九一―一九二）奢侈類（二三六―二三七）報応類（一〇二―一三九）将帥類（雑　智一九〇）軽薄類（二六五―二六六）謬誤類（二四二）

（巻五）隠逐、文字、書、絵、語、巧工、塚、雷　書類（二〇六―二〇九）畫類（二一〇―二一四）伎工類（二二語―二二七）塚墓類（三八九―三九〇）

（巻六）燈、石、水、海、人異、怪異　石類（波砂付三九八）水類（三九九）妖怪類（人妖付三語九―三六七）精怪類（三六八―三七三）

（巻七）鳥類（巻八）獣類（巻九）昆虫類（巻十）花類、果実類　鳥類（四六〇―四六三）畜獣類（四三四―四四六）水族類（四六四―四七二）昆虫類（四七三―四七九）草木類（四〇六―四一七）

従って花田氏の指摘はまず疑えない。この『新語園』の例から、了意の撰集、創作においては中国の類書『太平廣記』は極めて重要な素材源であることも示唆される。

またその傍証として、了意の肉筆写本とされる『太上感応編説定』（貞享二年、一六八五。この書についてはのちに詳述する）を挙げたい。この書の『太上感応編』巻三第一に関する注釈部分の余白に「元稚宗　太平廣記」と了意は書き入れ、同類の話が『太平廣記』巻一三一「元稚宗」にあることをはっきり示している。

なお、『伽婢子』の続編である翻案怪異小説『狗張子』（元録五年、一六九二刊）においては、了意は『太平廣記』を引用したと明記していないが、実際に『太平廣記』を原拠としたことがすでに麻生磯次[5]、冨士昭雄氏らによって指摘されている[6]。『狗張子』の45の説話のうち、『剪燈新話』、『剪燈余話』を原拠とするものを除き、残り殆ど（18話）が『太平廣記』に見出せる。しかも、ある文献は『太平廣記』にしか載っていない。例えば、『狗張子』巻三の一「伊原新三郎蛇酒を飲」は唐の裴鉶撰の『伝奇』「盧涵」の逐語訳とも言えるほどのものである。この『伝奇』の原本は早佚し、『太平廣記』にのみその佚文が収録されている。

それでは、『伽婢子』の場合、はたして類書『太平廣記』を原拠として引用したのだろうか。筆者は『伽婢子』の68の説話のうち『剪燈新話』、『剪燈余話』を原拠とするものを除いた48話を『太平廣記』と対照して、調べた結果、少なくとも31の説話が『太平廣記』に載っていることを突き止めた。

『伽婢子』	『太平廣記』
1・巻三の一、「妻の夢を夫面に見る」	巻二八二、「張生」（集異記）
2・巻四の二、「一睡三十年の夢」	巻二八一、「桜桃青衣」原典名なし
3・巻四の四、「入棺之尸甦侘」	巻三八三、「顔幾」（搜神記）
4・巻四の五、「幽霊逢夫話」	巻三三二、「唐晅」（通幽記）
5・巻五の一、「和銅銭」	巻四〇五、「岑元本」（博異志）
6・巻五の三、「焼く亡有定限」	巻一六三、「歴陽媼」（独異志）
7・巻六の一、「伊勢兵庫仙境」	巻一八、「元蔵幾」（杜陽雑編）

8・巻六の二、「長生の道士」　巻四八、「軒轅先生」（杜陽雑編）
9・巻六の四、「蛛の鏡」　巻四七六、「蘇湛」（酉陽雑俎）
10・巻七の一「絵馬之恠」　巻二八〇、「劉金復」（纂異記）
11・巻七の二「廉直頭人死司官職」　巻四七六、「蘇韶」（王隠晋書）
12・巻七の三「飛加藤」　巻一九四、「昆崙奴」（伝奇）
13・巻七の四「中有形化契」　巻三三四、「王玄之」（廣異記）
14・巻七の五「死亦契」　巻三四二、「華集参軍」（乾臆子）
15・巻七の七「雪白明神」　巻三五六、「馬燧」（博異志）
16・巻八の一「長鬚国」　巻四六九、「長髭国」（酉陽雑俎）
17・巻九の一「狐偽て人に契る」　巻三三九、「崔書生」（博物志）
18・巻九の二「下界の仙境」　巻二〇、「陰隠客」（博物志）
19・巻九の四「人面瘡」　巻二二〇、「候又玄」（酉陽雑俎）
20・巻杜の一「守宮の妖」　巻四七六、「守宮」（酉陽雑俎）
21・巻杜の二「妬婦水神となる」　巻二七二、「段氏」（伝奇）
22・巻の杜三「祈て幽霊に契る」　巻三四七、「曽季衡」（伝奇）
23・巻十の四「竊の術」　巻一九六、「田膨郎」（劇談録）
24・巻十一の五「魂蛻吟」　巻三五八、「裴珙」（集異記）

25・巻十一の録「魚膾の怪」　巻二二〇、「劉録事」（酉陽雑俎）
26・巻十二の五「盲女を憐れみ報を得」巻一一六、「鮑子都」（独異志）
27・巻十三の一「天狗塔中棲」　巻三五七、「丘濡」（酉陽雑俎）
28・巻十三の三「蛇瘂の中より出」　巻二二〇、「刁俊朝」（玄怪録）
29・巻十三の四「伝尸禳去」　巻八五、「徐明府」（稽神録）
30・巻十三の五「随転力量」　巻二六四、「李罕之」（北夢瑣言）
31・巻十三の八「馬人語をなす怪異」　巻四三六、「東市人」（酉陽雑俎）

このうちには、『玄怪録』（唐・牛僧儒）、『伝奇』（唐・裴鉶）、『通幽記』（唐・陳邵）など散佚書も含まれている。『玄怪録』と『通幽記』は『伝奇』と同じく『太平廣記』にのみ一部佚文が収録されている。了意がこれらの原書を見た可能性は殆どないと思う。

次に『太平廣記』の日本伝来について述べたい。宋の太平興国三年（九七八）に撰集され、漢代より宋代にかけての小説の殆どを収録した怪異小説集大成とも呼ぶべき『太平廣記』は、最初平安末期の藤原孝範の『明文抄』にその名が見られ、鎌倉時代の惟宗時俊の『医家千文字』には『太平廣記』の説話を14話も引用して、全文のかなりの分量をしめており、しかも引用文は殆ど原文と一致しているのが注目される。また子供を対象とする教科書とされる南北朝の『異制庭訓往来』にも『太平廣記』の名が現れる。五山文学の高僧である義堂周信の日記には『太平廣記』の説話が二箇所も引用されている。[7] 室町時代の抄本も現存する。江戸時代には『蓬左文庫漢籍分類目録』に『太平廣記』は購入本として登録されている。了意より二十数才年上の儒学者林羅山（一五八三―一六七五）の読書目録には『太平廣記』を

記入されている。因みに現在、日本の数多くの図書館では中国で最古とされている明版『太平廣記』が所蔵されているのも『太平廣記』の日本での流布を物語っている。さらに、鎌倉、室町時代、僧侶渡航による宋、元版書籍の大量輸入、江戸慶長帰以降書物の流通の事情を考えて、了意が直接『太平廣記』を利用したことは充分考えられるであろう。

二、

ところで、渡辺守邦氏は「浅井了意〈伽婢子〉」において『伽婢子』の出典について次のように述べられた。

それ（『剪燈新話』、『剪燈余話』を指す―筆者）以外の出典として、段成式撰『諾皐記』、鄭還古撰『博異志』その他の伝奇小説が挙げられるが、その多くが『説郛』に書名を見出すところであり、『伽婢子』が『剪燈新話』および『説郛』を利用しての、中国伝奇小説集の翻案であった、とするのが正しいようである。

だが、紙面の都合のため具体的論証はなさっておられないが、『説郛』には元末明初の人陶宗儀撰一〇〇巻本と明の陶延重校本一二〇巻本とがある。陶宗儀撰一〇〇巻本の成立は明洪武三年（一三七〇）以前である（明史稿列伝一六一によると序を書いた楊維禎が洪武三年卒としている）。しかし、原本は早佚し、郁文博が明の弘治九年（一四九七）に書いた重校序によれば当時その原書がすでに見えなかった。民国十六年（一九二七）張宗祥が六種の明抄本を校正し、上海の商務印書館より出版され、やっと陶宗儀一〇〇巻本の旧に復した。従って、了意が陶宗儀の『説郛』を見るのは殆ど不可能であったはずである。また張宗祥校の商務印書館陶宗儀一〇〇巻本の目録を『伽婢子』の出典書名と比べても16種の中5種しか見当たらず、渡辺氏があげられた段成式の『諾皐記』も見えない。恐らく氏が指摘された『説郛』は陶延重校の一二〇巻本であろう。この本は明・崇禎五年（一六三五）以後に重校されたが、明版『説郛裏』の癸未（崇

禎十六年、一六四三）冬至編者の序に「元季陶九成取古今書。濱二千家。翦其五。名説郛……献歳坊遊。方耳其書。京圻初届。坐者矜矜然。未肯許稍目。」[8]とあるのを見れば、崇禎末年には陶延重校本『説郛』は相当珍しい存在であったことが分かる。現在の通行本はこの版本ではなく、清の李際期重校説郛小序、王応昌重校説郛序のある清順治四年（一六四七）刊本である。（『舶載書目』に登録される『説郛』も清順治本である。）日本の図書館で所蔵される『説郛』は殆どこの清順治四年の版本で、陶廷刊本とみられるものは極めて少ない。李、王の序によれば、陶廷重校本の原本刊版は辛酉（天啓元年、一六二一）武林大火で焼き失われたため、順治四年に李際期が華容孫氏の善本により重校刊行したのである。実際に大火で原本刊版は完全に失われたか否かも疑を存するが、当時、中国では陶廷『説郛』刊本がすでに非常に少なくなっていることは間違いない。本題に戻るが、たとえ、了意が『説郛』を見得たとしても、順治四年刊（一六四七）李際期本の可能性が大きいであろう。しかし、了意の引用書目には『説郛』の名がみられないので、寛文六年（一六六六）に『伽婢子』を書いた時、実際に李際期重校本『説郛』が机辺にあったかどうかは疑問である。

陶廷本『説郛』は陶崇儀本の『説郛』とは編集態度が根本的に違って、当時伝本があるかないかを無視して、陶崇儀本にないものを各種の類書から集めているため陶廷本にのみ収録される書は七百十九種となっている。『剪燈新話』の引用書名16種の多くは陶廷本『説郛』に見出されるが、なお『異疾志』、『墨昆崙伝』は見当たらない。また、引用書の『才鬼記』の名は陶廷本『説郛』の目録に見えるが本文を読んでみると、内容が異なる。特に注意すべきは『伽婢子』の『霊鬼志』より六話も引いたとされることである。しかし、陶廷本『説郛』にある晋・荀氏撰『霊鬼記』においては「独孤穆」一篇の説話のみ載っていて、『伽婢子』の原拠とする六話が見出せない。この六話は唐・常沂撰とされる『霊鬼志』の内容になっている。これは一種の杜撰である。此の六話の原拠が唐・常沂撰の『霊鬼志』であることは宇

佐美氏が便宜的に清・陳蓮塘の乾隆年間編集の『唐人説薈』、別名『唐代叢書』という類書により調べて指摘されたのである。実際には『唐人説薈』の収録した『霊鬼志』は陳蓮塘により『太平廣記』の若干の説話とほかの説話を集めて一巻にし、勝手に唐・常沂撰にされたものである。(9) 六話の本当の原拠は『太平廣記』の巻三三二の「唐晅」、巻二八〇の「劉金復」、巻四七六「蘇湛」、巻三三四の「王玄之」、巻三四二の「華州参軍」、巻三三九「崔書生」である。以上述べたように『説郛』を『伽婢子』の翻案出典とするには種種の問題が残る。前述した了意と『太平廣記』の関わりを考えると、『剪燈新話』、『剪燈余話』のほかに、『伽婢子』の主要翻案原拠は、『説郛』ではなく、『太平廣記』であると考えざるを得ない。

三、

さて、『太平廣記』を原拠とした『伽婢子』の翻案説話においては中国道教の受容が特に注目される。次に、『伽婢子』巻六の二「長生の道士」を、原拠である『太平廣記』巻四十八「軒轅先生」と比較して、具体的に論じてみたい。

「長生の道士」の話を要約すると、以下のようになる。里見義弘は岩田刀自という老人に会った。老人は数百歳を超えたが、顔色はまだ五十才に見える。彼は十八歳のころ、仙人に会い、青丹を食い、長生術を教えられ、山に修業に行ったのだという。その話を聞いて、義弘は自分も長生術を覚えたいと思い、老人に教った。そして老人にご馳走をした。しかし、席上、老人は何も食わず、酒ばかり飲んで酔った色を見せない。これを見て、そばにいる女性たちが笑った。老人は怒って、仙術で若い女性たちをたちまち老婆に変身させた。義弘は老人を殺そうとしたがすぐ見破られた。老人は五百月あと、必ず災いが訪れると書いて姿を消した。それをよく見ると、「百」の字は「箇」となっている。五ケ

月あと、義弘は氏康に大敗した。以上、この話は原拠「軒轅先生」と大筋はほぼ同様で、逐語訳の部分も見られる、

○年過数百。顔色不衰。立於床前。則目光可長数尺。　(10)

←

さらに数百歳に及ぶといふて、年の数をおぼえず。髪髭は白きを変じて黄金糸のごとく、眼の色碧く耳ながし。顔色はいまだ五十とばかりの男にて、髪は垂れて座すれば地にたまり、名をとへば岩田刀自と号す。(中略)両眼の色青くなりてひかりあり、よく闇の中にものの見るべし。　(11)

○集白。綴聲色。去滋味。哀楽如一。徳施無偏。自然與天地合徳。日月斉明。

←

こたへていはく、心をしづめてわが物とし、色遠ざかり欲をはなれ、あぢはひうまき食をしりぞけ、たのしみかなしみたゞこれひとつにして心にとゞめず、徳をほどこしてかたおちなくば、自然に天地のめぐみかなひ、日月とひとしく寿ながく待べらん。

○四十年。但十字跳脚。宣宗笑白。朕安望四十年乎。乃晏駕。乃十四年也。

←

五百月は四十余年也。我がなんぞそれまでの命あらんやと。然るをよくよく見れば、百の字にはあらで箇の字なり。果たして五ヶ月の後、北条氏康のために鵠野台にして敗潰しけり。

しかし、目に引くところは了意が原拠「軒轅先生」の題名をはっきりと道教的タイトル「長生道士」に改め、さらに人を変身させる仙術を描く原拠の主題を変え、その筋を大きく発展させた上、原拠にない長生術に関する内容を大幅に

付加したことである。その付加内容は翻訳説話の半分にも達し、全話の筋は原拠よりはるかに豊富になった。

道教は神仙思想を中心に、老荘思想、易学、占トなどの信仰に基づき成立した中国土着宗教であり、人間の現世利益を重視する。不老長生を目的とする長生術は道教では極めて独特で重要なものである。大ざっぱに謂えば、道教の長生術は辟穀、服餌、調息、導引、房中術からなる。この長生術の代表的著書の道教の重要教典、晋の高道、葛洪（二八三～三四三）の『抱朴子・内篇』には次のようにある。

断穀正可息肴糧之費。不能独令長生也。問諸曾断穀積久者。云差少病痛。勝於食穀時。（『抱朴子・雑応』）（12）

即ち、穀を断つことは長生になるのみでなく糧を省くことにもなる。しかし、人間は断穀したあと病が消え、食穀の時より元気がよいと語っている。これに対して、「長生の道士」には、

五穀を断つ。更に飢る事をおぼえず。心を松風朗月にうそぶき、滝水になぐされば欲もなく怒りもなしといふ。

とある。この描写は明かに道教長生術の断穀の事である。「断穀」のためには、草根、木皮、岩石類で作った薬を飲む必要がある。これらの薬を飲むのはいわゆる「服餌」である。『抱朴子』には仙薬の種類を詳しく挙げ、とくに松葉の効用を強調する。

仙薬之上者丹砂。次則黄金。次則白銀。次則諸芝。（中略）次則石中黄子。次則石桂。次則石英。次則石脳。（中略）次則松柏脂茯苓地黄（中略）婦人（中略）食松葉松実（中略）至成帝之世三百許歳。（『抱朴子・仙薬』）

同じ「服餌」の内容は「長生の道士」にも出ている、

食は松の葉をとり茯苓をくらひ、薬は又兎糸子、茅根をもとめて、石をねりて膏をとり、霜も煮て飴となし、百花の露を凝らしてこれをねり、しばしば服する。

長生術では「気」を人体の根元と見て極めて重視する。「気」を絶えず保ち充実する時は長生できる。方法としては「調息」、「導引」、最も重要なのは房中術である。『抱朴子』には

抱朴子曰。欲求神仙。唯当得其至要。至要者在於保精行気。（中略）陰陽不交則生致壅閼之病。故幽閨怨曠多病爾不寿也。任情肆意。又損年命。唯有得其節。宣之之和。可以不損。

とある。「長生の道士」にもこれと同様な叙述が見られる。

をよそ世の人、内には七情の気欝滞し、外には風寒暑湿に陥溺し、色をほしゐままにし、（中略）寿命此故に縮まり、つゐに百年をたもつ人世にまれ也。

ここでは「七情の気欝滞し、色をほしゐままにし」を「寿命の縮まる」原因とし、気を調和するような房中術の肝心さを示している。さらに『抱朴子』には、

知亀鶴之遐寿。故効其道。引以増年。且夫松栢枝葉與衆木則別。亀鶴体兒與諸虫則殊。

とあって、鶴と亀を長生の例に取り上げてのべているが、『長生の道士』にも類似する内容がある。

汝鶴亀を見ずや、気を伏して息をしずかにす。この故に神気耗散せず、命いたりして長し、又病あることなし。

と、亀と鶴を例にして、導引の重要性を示した。『抱朴子・内篇』は『日本国見在書目録』と記され、早く日本に伝来した書である。浅井了意は「長生の道士」を翻案した際、『抱朴子』を直接参考にしたのか断定できないが、少なくとも、『抱朴子』に示したような道教の長生術には相当詳しいとは言えるであろう。

さと、「長生の道士」の翻案付加部分でもう一つ注目すべきは道教の神仙三品思想即ち三仙のことを示した部分である。『抱朴子』は三仙について、次のようにいう、

按仙経云。上士挙形昇虚。謂之天仙。中士遊遊名山。謂之地仙。下士先死後蛻。謂之屍解仙。

この三仙は天仙は玉京山仙境に住む上位の仙人で飛行自由である。地仙は諸洞天、十洲三島仙境に住む中位の仙人で、飛行できないが長生不死である。修行すれば天仙にもなれる。屍解仙は普通の人間が長生不死の薬草を飲んで、仙境に入ったもので一番下位にいる。道教においてはこういった仙位によって、仙人のクラスを分けている。「長生の道士」には原拠のない人物——老人に仙術を教えた仙人が新しく設定されている。これはまさに了意が道教の神仙三品思想を示すために作った人物である。「長生の道士」には次のような描写がある、「飛行自在なること、たとへ万乗の君もおよばず」また、「かの仙人、我をめしつられて雲をかけり、太山の峯にゆく」と。「飛行自在」の言葉はそのまま使われ、天仙が高く讃えられた。「かの仙人」はいうまでもなく飛行自在の上位仙人——天仙である。因みに「太山」とは則ち泰山であり、道教聖地とする五岳の筆頭である。泰山を司る泰山府君は日本にも大きな影響を与えた道教の神である。さらに仙人は老人に次のように教えた、

一千年にして、骨を易、二千年にして皮を蛻け、毛を易べし、これより、二度形をとろへず、よはひかたふかず命更に限りあるべからず。

これは屍解仙のことを明白に言っている。原拠には主人公はどのような仙人なのか明示されていないが、「長生の道士」には老人が屍解仙と限定され、天仙も設定されているから、神仙三品思想が原拠よりもはっきりと示されている。

以上のように「長生の道士」で付加された部分は全く道教長生術に関する内容である。特にこの中の「道教には此の身をもって大なるうれへのものとす」のごとく「道教」という言葉をそのまま使用しているのは了意が長生術の内容を付加するときのはっきりとした道教意識を示したものであろう。これに基づいて作者は原拠の改題、モチーフの変化、

人物の増設、長生術に関する内容の大幅の増加によつて、翻案作の『長生の道士』を原拠「軒轅先生」より一層道教化させた。指摘すべきはこのような傾向は『伽婢子』の『太平廣記』に基づくほかの翻案説話にも現れていることである。

例えば、『伽婢子』巻九の二「下界の仙境」である。その原拠は『太平廣記』巻二十の「陰隠客」である。両者を比べてみると、以下のごとくである。（1～4の数字は筆者が便宜的に付した。）

『太平廣記』巻二十

1・（題名）　陰隠者

2・梯仙国

3・有緋衣一人伝勅曰

4・然方得仙官職位、主籙主印、飛行自在。

『伽婢子』巻九ノ二

1・（題名）　下界の仙境

2・梯仙皇真宮

3・緋き装束に金の冠を着た人出ていふやう、大仙玉真君の勅定には

4・仙人の職にあづかり、官位をすすめ、符籙、印呪、薬術をきわめ、飛行自在の通力をさとり待べるこ

となり

1は、原拠のタイトルはただの人名であるが、これだけでは話の内容が分からない。了意はそれを「下界の仙境」に書き換え、説話の道教的内容を強調した。2、3は、了意の書き換えた「皇真宮」「玉真君」にいずれも「真」の字が入っているが、この「真」は道教と非常に深い関係がある。「真」とはありのまま、道家荘子の思想を代表する。道、妙理。真人者、道を悟る人。仙人が形を変じて、天に昇こと。天、道家でいう理想の境地。道経等の意味がある（『大漢和

辞典』諸橋轍次編、大修館）。因みに「大仙」「真君」は仙人を称する典型的な道教の名称である。4には、了意が原拠にない「薬術」を加えた。薬術とは道教の長生術のことである。

かくなる上は了意自身の道教の影響について検討すべきであろう。仏教徒の彼にとって、道教はどのように受けとめられたのか。中国の道教では、宋代以降、釈、儒、道三教合一の傾向が現れ、さらに明代になると三教合一思想が流行し、民衆的宗教思想に発展した。前述の『太上感応篇説定』の「誹謗賢聖書」に関する注釈部分の余白に「三教一致論」との了意の書き入れが見える。三教合の一思想は了意の仏書『法林樵談』（貞享三年、一六六八刊）にも示されている。

惟ミルニ儒釈道ヲ三教ト謂フ。其ノ立法ハ倶ニ改悪行善棄邪顕正ヲ以テ要トス。（中略）夫三教ノ至道寧ロ文字言詞ノ間ダニ翺翔シテ究極スルコトヲ待者ナランヤ。蓋シ三教ノ至理ハ斉シク道本ニ帰ルニ在テ帰スル所ロ且ク深浅有ルニ似タリ。

即ち、了意は三教合一の思想に基づき、改悪行善棄邪顕正の為の法として仏教と同様に道教を受けとめたのである。仏教唱導の為に道教的怪異説話翻案したのもまさにこの三教合一思想から出発したに違いない。この背後には江戸時代前期における道教の影響が窺える。了意とほぼ同じ時代の文人の多くは道教からかなりの影響を受けている。陽明学の祖である中江藤樹（一六〇八―一六四八）は『太上天尊太乙神経序』を書き、自ら道教の太乙神を祭っていた。貝原益軒（一六〇九―一六七七）は道教の『陰騭文』を読み、『養成訓』を著した。谷口一雲（一六二六―一七二〇）は自ら道士を任じ、弟子に道教の講義をして、『太上感応篇』等道教教典を筆写した。[13] しかし、その時期の道教の主な影響はやはり中国明末清初、道教の民衆化のために作った勧善懲悪を説く書物――善書の大量伝来である。この中、日本の文学、思

想、道徳に最も大きな影響を与えたのは善書『明心宝鑑』、『迪吉録』、『勧戒全書』および『太上感応篇』である。『太上感応篇』は善書の中心とも言うべき道教の教典であり、江戸から明治まで度重ねて翻刻、校注された。その『太上感応篇』を直接読んだのみでなく、精力的に自ら注釈を抄写した『太上感応篇説定』はまさに了意の道教との深いかかわりを示したものであり、特に注目すべきである。（この写本につき、北条秀雄氏は原本を詳しく調べ、了意の自筆だと断定された。[14] 中国の書籍には同名の校注本が見当たらないので、『太上感応篇説定』はただの写本だけでなく、当時『太上感応篇』に関する諸注を集成したかもしれない。）江戸時代に仏教徒によって日本に将来した道教の善書が仏教である了意自身の思想に融合してこそ、了意の翻案怪異小説の道教化はもたされたとも言えよう。

了意が『太上感応篇説定』を抄写したのは貞享二年（一六八五）で、いわば八十代、老年のころであったが、しかし、了意の道教との関わりは彼の仮名草子の創作生涯を貫いていた。その代表的仮名草子作品はいずれも道教の善書と関係を有するものである。

了意の最初の仮名草子作品、万治二年（一六五九）の『堪忍記』は善書『迪吉録』の内容を多く引用している。また、寛文元年（一六六一）の『浮世物語』には善書『明心宝鑑』よりの引用が明らかである。[15] この『浮世物語』の巻五の七「浮世房蛻たる事」は了意の道教思想の影響を示す好例である。心急な浮世房が修行もせずにいきなり飛行自在な仙人になろうとし、失敗に終わるこの説話は完全に道教の求仙のことを内容としている。この中には、「玉醴、金漿、交梨、火棗」「松脂、茯苓」など「不老長生の法を得」るための「仙薬」の名、また「天仙、飛仙、蛻仙」のような言葉が随所に見出され、すべて神仙三品思想、長生術など道教と関係する内容ばかりである。

中国文学は歴史的に見れば土着宗教——道教と関わっている。特に怪異小説の発生、発展、隆盛においては道教は終

始深く関係している。『四庫提要』巻一四六道家類小序には、

後世神怪之迹。多附於道家。道家亦自矜其異。如神仙伝、道教霊験記。

と記されている。中国怪異小説の繁盛期である魏晋南北朝には数多くの怪異小説の作者自身が道士或いは陰陽五行を好む者であった。例えば、葛洪（『神仙伝』）、陶弘景（『周氏冥通記』）、王浮（『神異記』）、王嘉（『拾遺記』）等は皆著名な道士であり、張華（『博物志』）、干宝（『搜神記』）、郭濮（『玄中記』）等は陰陽五行家と称される。『太平廣記』には大量の道教関係の書が収録されているのも道教の怪異小説に対する深い関わりを示すものである。従って、われわれは『太平廣記』の道教的怪異説話を翻案した近世翻案怪異小説の祖ともいうべき『伽婢子』、そしてそれに倣って書かれた近世怪異小説を研究する時、仏教のみでなく、道教の影響も視野に入れておかねばならないと言えよう。

注

（1）鈴木暢幸氏『江戸時代小説史』（昭和7）
（2）宇佐美喜三八氏「『伽婢子』における翻訳について」（『国語と国文学』第十二巻第三号）
（3）渡辺守邦氏「浅井了意〈伽婢子〉」（『国文学』37巻第9号8月号1992・8）
（4）花田富二夫氏「『新語園』と類書――了意読了漢籍への示唆」（『近世文芸』三十三号）
（5）麻生磯次氏『江戸文学と支那文学』（昭和21）
（6）冨士昭雄氏「浅井了意の方法――狗張子の典拠を中心に」（「名古屋大学教養部紀要」十一　昭和46・10）
（7）高橋昌明氏『酒呑童子の誕生』（中公新書1081　1992・6　中央公論社）
（8）倉田淳之助氏「『説郛』版本諸説と私見」（『創立二十五周年記念論文集』京都大学人文科学研究所）
（9）李剣国氏『唐前志怪小説史』（南開大学出版社　1984）

(10) 『太平廣記』（人民文学出版社、１９５９）本稿の『太平廣記』の本文の引用はすべてこの刊本による。
(11) 『伽婢子』（江本裕校訂、東洋文庫４８０）本稿の『伽婢子』の本文の引用はすべてこの校本による。
(12) 『抱朴子内篇』中華書局、１９８５、宋刻本影印版）本稿の『抱朴子内篇』の本文の引用はすべてこの刊本による。
(13) 中村璋八氏「日本の道教」（『道教３　道教の伝播』平河出版社　１９８３）
(14) 北条秀雄氏『新修浅井了意』（笠間書院　昭和４９）
(15) 前田金五郎氏「浮世物語雑考」（『国語国文』３４―６）